

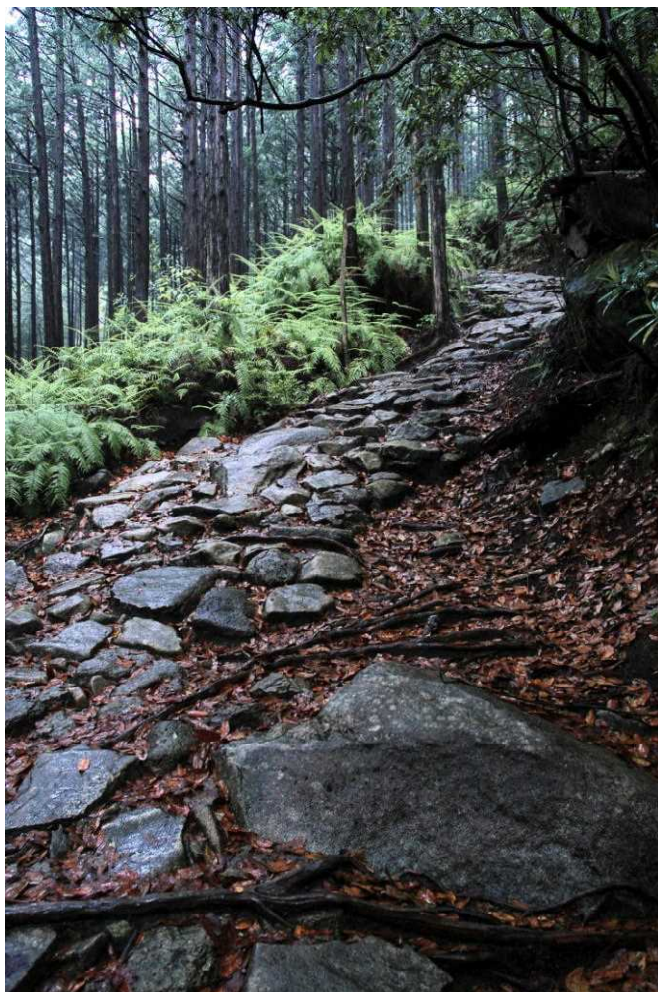


紀伊山地の霊場と参詣道



編集 三重県教育委員会

「紀伊山地の霊場と参詣道」世界遺産登録一〇周年記念  
歩いて旅する！世界遺産の道「熊野参詣道伊勢路」



馬越峠道の石畳（尾鷲市）



七里御浜（熊野市）



獅子巖（熊野市）

本書は、平成二六年一〇月一四日、東京都中央区日本橋室町の「三重テラス」で開催しました対談、『第一回にはんばし世界遺産ゼミナール 歩いて旅する！「世界遺産となった道―熊野参詣道伊勢路―」』をもとに、内容を一部加えたものです。

なお、本文中の破線箇所については、巻末の用語解説もご参照ください。



コメンテーター  
伊藤文彦



コーディネーター  
伊藤あや

対談者プロフィール

コメンテーター

伊藤文彦 齋宮歴史博物館学芸員

大学で考古学を専攻し、三重県教育委員会に文化財保護技師として就職。遺跡の発掘調査をはじめ、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」や三重県内の史跡の保護・活用を担当。現在は国史跡齋宮跡の調査と研究を手がけている。

コーディネーター

伊藤あや フリーアナウンサー

三重県内を中心にテレビやラジオのパーソナリティなどを務める。マイクを片手に県内全域を歩き回り取材を重ね、その魅力を多くの人に伝えたいとFM三重では「あやのみえ旅」という番組を立ち上げた。二〇一二年にはピースポルトで世界一周を経験。

# プ ロ ロ ー グ

**伊藤あや** 本日は、『歩いて旅する！「世界遺産となった道―熊野参詣道伊勢路―』と題しまして、コメンテーターをお迎えし、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」が、世界遺産になぜなったのか、その価値や魅力は何か、そしてその楽しみ方などについて語っていただきます。私は、本日の進行役の伊藤あやと申します。

それでは早速、本日のコメンテーターをご紹介します。三重県多気郡明和町にございます、齋宮歴史博物館の伊藤文彦さんです。

**伊藤文彦** 伊藤文彦と申します。私は、三重県で遺跡の発掘調査を行う、文化財保護技師として三重県に勤めています。世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」については、その保護や他県などとの調整を担当してまいりました。現在は、明和町にございます、国史跡齋宮跡の調査と研究に携わっております。

**伊藤あや** 伊藤さんは、「伊勢から熊野へ聖地巡礼歩き旅復活プロジェクト

ト」を主宰され、有志のグループで実際に伊勢から熊野まで歩かれた経験があるとうかがっております。本日はそのあたりのお話もお聞かせ願えると期待しております。実は私も一人旅が大好きで、よく国内や海外に出かけます。伊藤さんのお話を楽しみにしております。本日は、どうかよろしくお願いいたします。

**伊藤文彦** よろしく願います。

**伊藤あや** 本日は、平成二六年七月七日に世界遺産登録一〇周年を迎えました、「紀伊山地の霊場と参詣道」につきまして、いま改めて世界遺産としての価値を明らかにし、将来に何を伝え、残していくべきかを、コメントーターの伊藤さんのお話から導き出せればと思っております。そのため、いくつかお聞きしたいことを私の方でご用意いたしました。伊藤さんにはそれに答えていただくかたちで、進行させていただきます。

**伊藤文彦** どうぞよろしく願います。



伊勢参りと熊野詣

**伊藤あや** さて伊藤さん。世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」も今年で登録一〇周年を迎えましたね。その中でも三重県は熊野参詣道伊勢路が世界遺産に含まれていますが、私も三重県に住む人間として、うれしく思います。地元では「熊野古道」として親しまれているこの道、伊勢神宮と熊野三山を結ぶ道ということですが、私、「伊勢へ七度（ななたび）、熊野へ三度（さんど）」というのを聞いたことがあります。一生の間に、伊勢神宮へは七回参り、熊野へも三回詣でるのが良いという意味だそうです。伊勢神宮と熊野はどういう関係にあったのでしょうか。

**伊藤文彦** 伊勢と熊野の関係、たいへん大きな質問だと思います。伊勢と熊野の関係となりますと、まず江戸時代のお話から始めたいと思います。江戸時代、庶民による伊勢参宮、お伊勢参り、が盛んに行われていました。とくに、周期的に起こった「お蔭参り」と呼ばれる、大勢の人々が熱狂的に伊勢神宮に参るものがよく知られています。それで、伊勢神宮に参

拝した人はそこからもと来た道を帰っていく、というわけではありませんで、参宮の後、さらに旅を続けるのです。伊勢から西へ進んで、隣町にあたる現在の度会郡玉城町の田丸という町まで進みます。実はこの町が分岐点で、まっすぐ西へ進むと伊勢本街道という街道をとおって、現在の京都や大阪へ、田丸で南に進むと熊野方面になります。この熊野へ向かう街道こそが、伊勢神宮と熊野三山を結ぶ熊野参詣道伊勢路だったわけです。

関東地方や東北地方から来て、伊勢参りを済ました旅人は、田丸にたどり着いたら、京都などの見物に向かうか、南に下って熊野へ向かうか決断し、旅を続けたわけです。つまり、江戸時代に伊勢神宮へ参拝した人が次に向かう巡礼地、これが熊野三山、そういう関係だったのです。

**伊藤あや**　そうですね。江戸時代の人は、いったん旅に出ると、なかなか帰らなかつたのですね。当時は電車も自動車もない時代ですから、歩くのが基本になるのですが、歩いて旅を続けていくのは、さぞかし大変だ



ったでしようね。

**伊藤文彦** はい。私も経験あるのですが、歩いて旅をするのは本当に大変ですね。ところが、非常に多くの人が実際に歩いて旅をしていますね。またそういう記録や書物も多く残っています。先ほどの「伊勢へ七度、熊野へ三度」という話は、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』などの中でも記されているのですが、この書物には、弥次さんと喜多さんが伊勢参りのため、江戸から伊勢へ向かう道中が面白おかしく描かれています。弥次さん喜多さんの場合は、伊勢に参ったあとそのまま、大和、現在の奈良県を經由して大坂に向かいました。これはさきほど、田丸で分岐してまっすぐ西へ向かう伊勢本街道を通ったと思います。

弥次さん喜多さんのお話は物語ですが、実際の旅日記として残っているものとしては、江戸時代の後半、越後、今の新潟の鈴木牧之という人が、伊勢、熊野三山、さらにその先も巡礼旅をしていまして、その時の見聞を

まとめた『西遊記神都詣西国巡礼』というものがあります。この時、鈴木牧之は、伊勢参宮ののち、熊野参詣道伊勢路を経て、新宮の速玉大社へ向かったことがわかります。

このほか、修験者の野田泉光院という人物が旅したときの日記『日本九峰修行日記』では、伊勢参りを済ました後、伊勢路をとおって熊野本宮へ向かった話も残っています。

**伊藤あや** 江戸時代の伊勢や熊野への旅の様子はそのような書物からもわかるのですね。では、それより前はどうかだったのでしょうか。

**伊藤文彦** 平安時代まで遡ると、例えば、『いほぬし』という紀行文をのこした増基法師という十一世紀前半頃の人物がいるのですが、この人は京都を出発し、淀川を下って大坂の住吉へ、そのまま現在の和歌山市を通って、紀伊田辺から中辺路という道を通って、熊野本宮へ向かっています。熊野本宮から新宮に回り、三重県に入りまして、現在の熊野市の花の窟、

そして楯ヶ崎という景勝地に立ち寄り、松坂を経て、京都へ帰っています。また、同じく平安時代の終わり頃になると、皇族や貴族らが熊野詣を行っています。皇族といっても、天皇は来ないのでですね。天皇を退位した上皇とか、仏門に入れば法皇とも呼ばれますけども、そういう人が貴族を引き連れてくるのです。

平安時代の終わり頃の歌人に藤原定家という人がおります。この人は、小倉百人一首の撰者というほうがわかりやすいかもしれません。この藤原定家は、後鳥羽上皇の熊野詣に随行していきまして、詳細な日記を残しています。建仁元年（一二〇一年）のことです。これによりますと、京を出立して、淀川を下り、大坂の住吉から、やはり和歌山回りで熊野三山に向かいました。この時、「九十九王子（くじゅくおうじ）」と呼ばれる、熊野三山の途中、要所、要所に設けられた折りの場所に立ち寄り、奉幣つまり神に供物を捧げたり、あるいは読経などを行い、紀伊路を進み、中辺路を本

宮に向かったようです。

本宮からは、熊野川を下り、新宮へ、そして那智大社へ向かい、その後、那智から本宮へ直接向かう陸路を通って本宮へ戻り、そこから元の道を通り帰京しています。これが当時の皇族や貴族の一般的な熊野詣の行程だったわけ  
です。

**伊藤あや** 古く、平安時代の皇族や貴族の人たち、上流階級の人たちということになるのですが、そういう人々の熊野詣は、都から大坂、和歌山回りで熊野まで往復するだけで、伊勢路



滝尻王子（和歌山県田辺市）



は通らなかつたのでしうか。

**伊藤文彦** そうですね。伊勢路をわざわざ回って帰ることはなかつたようです。当時もう一人、伊勢路を歩いて旅した人物に西行さいけいがいます。西行は歌人として非常に有名です。彼が熊野へ参詣した際の歌は、「山家集（さんかじゅう）」という歌集に多く残っています。西行も熊野詣の際、新宮から伊勢に向かつたようで、「みき島」という所であま人、海に潜る「あま」のことですが、その「あま」についての歌を詠んでいます。「みき島」は現在の熊野市の二木島か、尾鷲市の三木里のことと思われます。

増基法師の例といい、西行の例といい、古くは、都から紀伊路回りで熊野へ参詣した後、伊勢路を新宮から伊勢へ向かつて旅をしたのは、諸国を行脚する僧侶ぐらいなのかもしれません。

**伊藤あや** それでは当時の伊勢路は、伊勢から熊野へ向かう参詣道としては、まだそれほど利用されていなかつたということになるのでしょうか。

**伊藤文彦** ところがそうでもないのです。平安時代の終わり頃になります  
が、後白河法皇、NHKの大河ドラマ『平清盛』で松田翔太さんが演じて  
いた、あの人です。ドラマの中で、よく歌を独特の節にのせて歌っていま  
したよね？あれが「今様」という当時流行していた歌なのですが、後白河  
法皇はその「今様」を集めて『梁塵秘抄』という書物にまとめているんで  
す。その中の一節には「熊野へ参るには、紀路と伊勢路のどれ近し、どれ  
遠し、廣大慈悲の道なれば、紀路も伊勢路も遠からず」という歌がありま  
す。つまり、この頃には伊勢路が紀伊路と並ぶ熊野への参詣道として少な  
くとも都の人々は考えていた、ということがわかります。

**伊藤あや** 平安時代の終わりから鎌倉時代へと変わっていく頃には伊勢路  
もすでによく知られていたのですね。そのあとはどうなるのですか。

**伊藤文彦** 鎌倉時代の話を少しいたしますと、現在の四日市市にある善教  
寺ぜんきょうというお寺に大きな阿弥陀仏の像があるのです。その仏像の体の中にお

さめられていた文書がありまして、これを『作善日記（さぜんにつき）』と呼んでおりますけど、一体何が書いてあるかというと、今の三重県の四日市市や桑名市の周辺に根拠地をおいていた藤原実重という地方の武士は、もう本当にすごい大金持ちといえますか、豪族でして、その人の日々の信仰の記録が書いてあるのです。

たとえば、熊野三山へ盛んに米とか物資を寄進したり、実重は、彼自身も熊野詣を行っていますが、普段から、熊野へ向かう道者さん、いわば修行僧ですね、これに対して、お風呂沸かして入れてあげたり、食事をだしたり、熊野へ進物を託し道者を送り出していました。ようするに、伊勢と熊野はこの時代にもつながりがあるわけです。

**伊藤あや** 伊勢と熊野のかかわりはよくわかりました。それでは、江戸時代に大勢の人が伊勢へ、さらに熊野へ向かったということですが、実際にそういう参詣の旅に出たのはどういう人たちなのでしょう。いわゆる普

通の庶民の人でも旅にできることではできたのですか。

**伊藤文彦**　じつは、当時の農民だったり、商家の奉公人だったり、そういう人もこういう参詣の旅へできることができたのです。たとえば、伊勢への「お蔭参り」は、抜け参りともいわれ、使用人が雇い主に無断で伊勢参宮を行うことをいいます。無断であっても、伊勢参りならば許される、という風習がありました。神宮のお札など、確かに参詣したという証拠を見せればよかつたみたいです。また、道中は、さほど路銀を持ち合わせていなくても、沿道で施しを受けながら旅を続けることもできたといえます。

**伊藤あや**　伊勢神宮へお参りすることは、昔から誰でも可能だったのですか。

**伊藤文彦**　実はですね、伊勢神宮は内宮に皇祖神、つまり天皇の祖先神ですが、これを祀っていましたので、本来は皇族や公家が天皇の代理、勅使として参宮が許されるだけでした。その後、平氏など、宮中で地位を得た

武士も参宮に加わりませんが、鎌倉時代、室町時代と戦乱が続くと、次第に伊勢神宮への信仰が衰退していききました。

そこで「御師（おんし）」とよばれる下級神職が、全国各地を訪れ、伊勢参宮への勧誘、参拝者の宿泊の世話、外宮においては、祭神で農業・商売の神である豊受大神への信仰を商家や農民層に布教活動を行ったのです。農民にとつては、御師が布教に際して配る「伊勢曆」が重宝で、暦によつて年間の季節のサイクルを知り、農業に役立たせることができました。これにより、全国に農業の神である豊受大神への信仰心が高まったものと思われまます。

**伊藤あや** 当時の農民といえば、時代劇などを見ますと、年貢を厳しく取り立てられて、苦しい生活を強いられたようなイメージがあるのですが、そんなに自由に伊勢参りができたのですか。

**伊藤文彦** 確かに、当時の農民には、年貢の負担や田んぼの耕作を放棄し

て逃げ出してしまふのを防ぐために、他国への移動の規制がありました。伊勢参りは例外的に農民の旅行が認められる理由となっていました。

その結果、農業に関する情報交換や技術交流が盛んとなり、稲の品種改良も進み、農業は江戸時代に随分と進歩することにもなりました。そうなると、多少なりとも暮らしに余裕も生まれ、さらなる伊勢参宮を可能としました。



伊勢暦（三重県総合博物館所蔵）

場所によつては、それでも伊勢までの旅には経費がかさみます。そこで、村で寄り合つて皆で少しづつお金を出し合い、くじ引きで代表者が伊勢参りをすると、いうシステムが作られました。これを「伊勢講」といいます。庶民にとつて、伊勢参りは生涯に一度は叶えたい夢でした。

**伊藤あや** そうして伊勢に参詣した人のうち、その後田丸で「笈摺（おいずる）」というものを身に着けて、熊野を目指す人がいたということもうかがつたりするのですが、その「笈摺」を身に着ける意味は何だったのでしょうか。また、伊勢参りだけで終わらず、なぜ、遠く熊野へ向かったのでしょうか。その目的は何だったのでしょうか。

**伊藤文彦** まず、「笈摺」についてですが、これは着物の上に羽織る袖のない薄い衣で、旅をするときに荷物を入れて背中に背負う箱を「笈」というのですが、それを背負つて着物が擦れて破れてしまふのを防ぐために羽織るものなのです。





田丸の城下町などで販売もしていきまして、旅人はそこで衣装を手に入れれば、突然に思い立つても巡礼に向かえたようです。

**伊藤あや** 熊野へ参詣する人も、時代により変化があつたということです。よね。

**伊藤文彦** 平安時代に皇族や貴族が行つた華やかだつた頃の熊野への参詣は、道案内である「先達（せんだつ）」と呼ばれる人物のもと、作法を守りながら精進齋しつつ旅をする、というものでした。参詣道も急峻なところが少なくなく、熊野に参詣すること自体が難行苦行だったので。

しかし、室町時代になり、皇族や貴族、武士だけでなく、豪商・豪農層が先達や、熊野で宿などを提供する御師（おし）、伊勢神宮の「おんし」と同じようなものですが、その御師に勧誘されて熊野に参詣するようになりました。

やがて戦国時代の混乱期ののち、安土桃山時代、江戸時代と、西国三十

三所巡礼が活発になるに従い、熊野は再び盛んに参詣されるようになったのです。

**伊藤あや** 熊野へ参つてからさらに西国三十三所巡礼に向かうということですか。その西国三十三所巡礼とはどういうものなのでしょうか。

**伊藤文彦** 西国三十三所巡礼というのは、和歌山、奈良、大阪、兵庫、京都、滋賀、そして岐阜にある観音信仰の霊場を巡礼するものです。一番札所の那智山青岸渡寺から三十三番札所、現在の岐阜県の谷汲山華嚴寺まで、千キロメートルほどの巡礼の旅が必要だったことになりました。

**伊藤あや** 札所を順番に巡っていくのですね。私たちに馴染みがある四国八十八ヶ所遍路と同じですね。

**伊藤文彦** はい。西国三十三所巡礼の場合、それぞれの札所には、観音像があります。これを札所本尊と呼びます。札所本尊は、その寺院の本尊とは異なる場合もあります。秘仏として扱われるものも多く、中には数十年

に一度しか開帳しないものもあります。

観音菩薩は、千手観音や如意輪観音など、救済を求める人々の願いに応じて、三十三の異なる姿に変身するとされ、一説には三十三箇所という札所寺院の数もそれに由来する、といわれています。

**伊藤あや** 西国三十三所巡礼のルートというのは、熊野の那智の青岸渡寺を一番とし、三十三番目が今の岐阜県の華嚴寺とのことですが、そもそも熊野から始めて岐阜で終わるといふ、その順番を決めたのは、どういう理由なのでしょう。

**伊藤文彦** 実はですね、西国三十三所巡礼が始まった当初は、どうもこの順番ではなかったようです。滋賀県の三井寺の歴代の高僧の伝記で『寺門高僧記』と呼ばれる古文書があるのですが、それによると、実は三十三所観音霊場巡礼の一番は、奈良の長谷寺で、最後は京都宇治の三室戸寺だったとされているのです。これは平安時代の終わりごろの話なのですけど

も、当時はまだ、江戸時代のように庶民が三十三所を巡礼できたわけではなく、行者や修行僧などに巡礼が限られていたと思われれます。

長谷寺は、藤原道長ら、当時の権力者である摂関家も参詣しています。平安時代のある時期までは、観音霊場の代表は長谷寺だったのでしよう。都から出発してまず奈良の初瀬へ、そして京都の宇治に帰ってくるという都を中心とした巡礼であったようです。

しかし、平安時代の終わり頃、鳥羽上皇や後白河法皇が熊野詣をさかんにおこなうようになるにつれて、那智大社の青岸渡寺を一番札所とするようになったと考えられます。その時点でも、最後の三十三箇所目は、三室戸寺で、京都に戻るようになっていました。

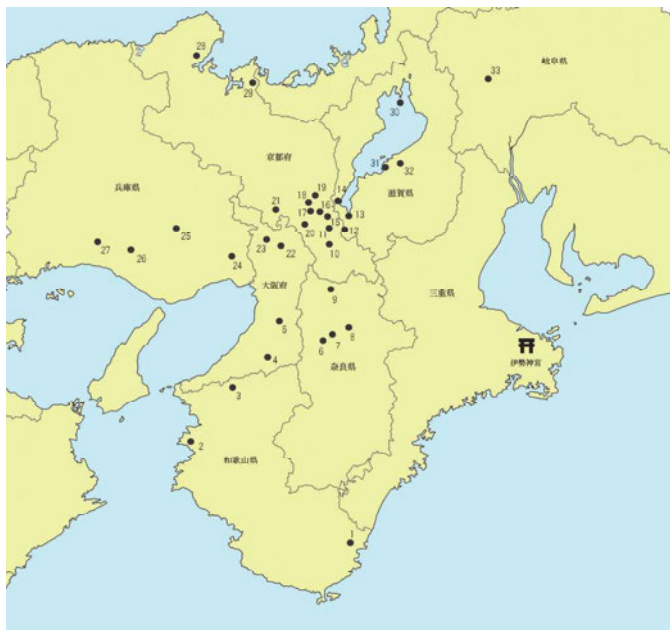
ところが、室町時代に入りますと、関東地方や東北地方など東国からの旅人が、まず伊勢参りをして、そのあと熊野詣を行い、さらに、西国三十三所巡礼を行うという旅のルートがかなり盛んになるようなのです。熊野

に始まり、近畿一円を回り、最後に岐阜の華嚴寺に至るといふ、現在の巡礼路は、関東などの東国へ帰る順路として適していました。

ちょうどこの室町時代に、巡礼の「巡」めぐる、という漢字を、順番の「順」で書き表すことが増えていきます。江戸時代になるとほとんど順番の「順」です。札所を順番にまわる、そのスタートは伊勢であり、第一番札所が青岸渡寺である、そういう順番がきまっています。

あと、先ほどから「西国三十三所」と呼んでいます。西国」といふのは、都の人にとっては九州などのことなのです。近畿を「西国」と呼ぶのは、関東の人たちです。つまり「西国三十三所巡礼」と呼ぶようになったのも、関東からの巡礼者が増える室町時代からですね。

**伊藤あや** なるほど、主に関東の庶民による西国三十三所巡礼が、とくに熊野参詣道伊勢路を理解する上で、大きなポイントになるわけですね。



西国三十三所観音霊場巡礼札所

札所	山号	寺号	所在地	札所本尊
1	那智山	青岸渡寺	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町	如意輪観音
2	紀三井山	金剛宝寺護国院	和歌山県和歌山市	十一面観音
3	風猛山	粉河寺	和歌山県紀の川市	千手観音
4	横尾山	施福寺	大阪府和泉市	千手観音
5	紫雲山	葛井寺	大阪府藤井寺市	千手観音
6	壺阪山	南法華寺	奈良県高市郡高取町	千手観音
7	東光山	龍蓋寺	奈良県高市郡明日香村	如意輪観音
8	豊山	長谷寺	奈良県桜井市	十一面観音
9		興福寺南門堂	奈良県奈良市	不空罽索観音
10	明星山	三室戸寺	京都府宇治市	千手観音
11	深雪山	上醍醐寺	京都府京都市伏見区	准胝観音
12	岩間山	正法寺	滋賀県大津市	千手観音
13	石光山	石山寺	滋賀県大津市	如意輪観音
14	長等山	園城寺観音堂	滋賀県大津市	如意輪観音
15	新那智山	観音寺	京都府京都市東山区	十一面観音
16	音羽山	清水寺	京都府京都市東山区	千手観音
17	補陀落山	六波羅蜜寺	京都府京都市東山区	十一面観音
18	紫雲山	頂法寺	京都府京都市中京区	如意輪観音
19	靈應山	行願寺	京都府京都市中京区	千手観音
20	西山	吉峯寺	京都府京都市西京区	千手観音
21	菩提山	穴太寺	京都府亀岡市	聖観音
22	補陀落山	總持寺	大阪府茨木市	千手観音
23	応頂山	勝尾寺	大阪府箕面市	千手観音
24	紫雲山	中山寺	兵庫県宝塚市	十一面観音
25	御嶽山	清水寺	兵庫県加東市	千手観音
26	法華山	一乗寺	兵庫県加西市	聖観音
27	書寫山	圓教寺	兵庫県姫路市	如意輪観音
28	成相山	成相寺	京都府宮津市	聖観音
29	青葉山	松尾寺	京都府舞鶴市	馬頭観音
30	厳金山	宝厳寺	滋賀県長浜市	千手観音
31	姨綺耶山	長命寺	滋賀県近江八幡市	千手観音 十一面観音 聖観音
32	織山	観音正寺	滋賀県近江八幡市	千手観音
33	谷汲山	華厳寺	岐阜県掛妻郡掛妻川町	十一面観音

## 西国三十三所観音霊場札所一覽

熊野参詣道伊勢路について



伊藤あや　それでは次の話題に移りたいと思います。その熊野参詣道伊勢路についてお聞きします。まず、熊野参詣道伊勢路とはどういう道だったのでしょうか。歩きやすい道だったのでしょうか。

伊藤文彦　今もそうなのですが、正直、歩きにくい道だった、かなり険しい道だったと思います。まず、伊勢路の全体をざっとみますと、伊勢神宮から大紀町と紀北町にかけての荷坂峠道やツヅラト峠道に至るまでは、山道らしい箇所は少なく、比較的に高低差の少ない歩きやすい街道です。

しかし、荷坂やツヅラト峠道から南は、アップダウンの激しい、厳しい峠道が連続します。熊野市の松本峠を抜けると、花の窟の辺りで、南の新宮の速玉大社へ向かう、通称「浜街道」か、熊野本宮大社へ向かう「本宮道」に分かれます。新宮へ向かう場合、もう急な山道の上り下りはありませんが、「浜街道」は、ほぼ直線的に新宮を目指せる反面、河口付近や波打ち際に近い箇所を歩く時に遭難事故がしばしば起こり、「親知らず子知

らず」などと呼ばれていたようです。  
本宮道はこの先も横垣峠や風伝峠、  
万歳（ばんぜ）峠など、峠を延々と  
越えていくことになります。

**伊藤あや** その険しさが聞いている  
だけでも伝わってきますね。ただ、  
一方で伊勢路は美しい景色が楽しめ  
る道とも言われていますね。

**伊藤文彦** 伊勢路の美しさ、という  
と、紀北町から尾鷲市に通じる馬越  
峠道をイメージされる方が多いかも  
しれません。峠道には石畳が敷かれ  
た所も多く、それと周囲のスギやヒ



七里御浜

ノキの林の美しさがマッチして、非常に美しいわけです。浜街道に沿った七里御浜も、太平洋を望む美しい浜です。絵図でみると、江戸時代は街道ではなく、浜を歩く旅人の姿が描かれています。西国三十三所巡礼の旅人は、まず第一番札所のある那智を目指すわけですから、通常、この浜街道を通ったと考えられます。

**伊藤あや** 昔の街道といえ、まず思い浮かぶのは東海道ですが、そのような有名な街道とは違いがあるのですか。

**伊藤文彦** たとえば、東海道といえますと、江戸時代に、京・大坂と江戸を結ぶ街道として最も重視された街道ですね。江戸と京都の間に五十三の宿場が整備されて、「東海道五十三次」と呼ばれていました。

東海道は、江戸幕府によって街道の幅も五間、約九メートルを基準とした広い道でした。また、大名の参勤交代や物資の輸送路として利用され、街道の行程の目印となる一里塚も設け、いくつかの河川には橋や渡し船を

置かないといった軍事的な配慮もなされた街道です。

それに対し、熊野参詣道伊勢路は、伊勢神宮と熊野速玉大社、熊野本宮大社とを結び、主に熊野参詣を目的とする旅人が利用する街道でした。伊勢神宮から田丸までは、伊勢本街道や参宮街道など、他の街道と重複する区間があるのですが、大部分の街道は、紀州藩領となっており、江戸時代の初めに、藩主の徳川頼宣により、和歌山城下から紀伊半島をぐるりとまわる街道の整備を行いました。

これは熊野往還道と呼び、伊勢と和歌山を結ぶ、藩内の交通路として重視したのだと思います。一里塚も設置するなど、とくに街道が参詣道であることを意識しての整備だったかもしれません。石畳もこの時に整備した所もあると思います。

**伊藤あや** 伊勢路の場合、峠道が連続するので、旅人は随分と苦勞したそうですね。

伊藤文彦 それはそれは苦勞した  
ようです。伊勢路の最大の難所が  
「八鬼山越え」という道です。馬  
越峠道のように石畳が敷かかれてい  
る箇所が多い所ですが、江戸時代  
の旅人は散々苦勞をして峠越えを  
したようです。二度とこんなところ  
こない、とかね、日記にかいて  
あるものもあるんですよ。「八鬼  
山越え」について、伊勢路の中  
でも特徴的なのは、「町石」と呼ば  
れる、一町つまり一〇九メートル  
ごとに設置されたお地藏さんの形



八鬼山越えの道と町石（尾鷲市）

をした道標があり、かつては「八鬼山越え」の峠までの五〇町の間、一町ごとの目印となっていたと思われます。

今では数も三十三体、決して一町ごとに並んでいるわけではありませんが、これら町石は、主に一五七三年から九一年まで続いた、天正年間、ちようど室町幕府が倒れて、織田信長や豊臣秀吉が天下取りを目指していた頃ですね。その頃、伊勢の山田、河崎、大湊といったあたりの人々によって寄進されたことが石仏に刻まれています。

**伊藤あや** 今もそのようなものが残っているのはすごいですね。ところで昔の人は、伊勢路を旅するにあたり、宿や食事などの心配はなかったのですか。

**伊藤文彦** はい、実はその点は重要ですよ。先ほどの東海道などでは、宿場町も整備され、街道途中にも茶店などもあり、お金さえあれば、旅するのに不自由はあまりなかったと思います。一方で伊勢路の場合も、基本、

宿は村々にあり、街道もそれら村をつないでいて、まったく無人の山中、荒野をひたすら行かなければならない、あるいは夜は野宿しなければならぬというわけではないのですが、峠などには茶屋のある所もあるとはいえ、やはり昼ご飯は持っていないと不便でした。そのため、「飯行李（めしごうり）」、つまり弁当箱を持参し、泊まった宿でお昼用のお弁当を用意してもらう、というのがあつたようです。

旅日記を見ると、ちゃんと宿代に弁当代も含まれているのが記されています。その「飯行李」は、「笈摺」といっしょに田丸で購入できたとされています。

伊藤あや 宿を出発する際に、持参した「飯行李」、お弁当箱に宿でお弁当を入れてもらえ



飯行李  
(三重県立熊野古道センター所蔵)

る、というのは、なんだか旅も楽しくなりますね。

**伊藤文彦** まったくそのとおりですね。街道沿いに食堂や露店があるのもいいですが、峠道の多い伊勢路だと、山の中でお昼ご飯時になることもあ  
るでしょうから、お弁当があるのはうれしいですね。現代でも歩いて旅を  
する場合だと、今でも必要なシステムと言えますね。

**伊藤あや** 一泊二食でさらに昼食付きになるのですね。ところで今、私た  
ちは世界遺産の呼び方に従って、熊野参詣道と申し上げていますが、昔は  
どのように呼ばれていたのでしょうか。また、参詣道と呼ぶことにどうい  
う意義があるのでしょうか。

**伊藤文彦** そうですね、多くの皆さまはおそらく「熊野古道」という呼び  
方に一番親しまれているのではないかと思えます。これは、熊野にある古  
い雰囲気のある道ということで、いわば現在の愛称です。江戸時代にはど  
う呼ばれていたか、となりますと、道標などをみてみますと、「くまのみ





野中の道標  
(多気町)

ち」とか「さいこくみち」、西国巡礼道という意味ですが、そのように記されていることが多いです。それから、「熊野街道」という呼び方もあります。これは現在の国道などでも使われている名称でもあります。

では、熊野参詣道というのは、どういう意味か、と申しますと、これはずいぶん意味が変わってきます。これは、熊野へ参詣するための道、つまり熊野への巡礼路なのだ、という意味が加わるのですね。そうすると、熊野参詣道の場合、人々が往来する、行き来する街道というより、熊野三山

への巡礼が目的の道という意味が前面に出てきます。そして、この道は旅人にとっては、熊野三山を屈指した一方通行の道という意味合いを強く示すことにもなっています。

熊野参詣道伊勢路の場合、江戸時代には、ほとんどの人が伊勢神宮と熊野を往復するのではなく、その後に関西巡礼へと向かうため、伊勢から熊野へと、いわば一方通行なのです。

**伊藤あや** 同じ熊野参詣道ですが、和歌山県や奈良県の場合、中辺路や、小辺路というように分かれていましたよね。

**伊藤文彦** その通りでして、熊野参詣道には、伊勢路以外にも、和歌山県の田辺市から本宮大社へ向かう中辺路や、田辺市から大きく紀伊半島沿岸に沿って那智大社へ向かう大辺路、そして高野山と本宮大社を結ぶ小辺路があります。那智大社と本宮大社を結ぶ峠道や、那智大社と速玉大社を結ぶ道は、中辺路に含まれます。また、田辺と大坂の間は、単に紀伊路と呼



紀伊山地の霊場と参詣道

ばれています。

**伊藤あや** それぞれの霊場へ向かう別ルートと考えていいのですか。

**伊藤文彦** 別ルート、と言ってもよいと思いますが、その歴史的な背景も異なります。中辺路は先ほどから述べていますように、平安時代から皇族、貴族などが京都から熊野詣を行う際に通った道ですが、大辺路は、江戸時代に入って、紀州藩の交通網整備の一環として整えられたとされていますが、いつ頃から利用された道かはよくわかっていません。しかし、参詣道としての利用は、江戸時代の西国巡礼に際してで、景色がきれいなので観光がてらに通行した道と考えられています。

また、小辺路は、高野山と本宮大社を最短距離で結ぶ急峻な道で、元は紀伊山地部に住む人々の生活道路的な性格だったとされますが、江戸時代になると、熊野参詣道として利用する記録がありますし、それ以前でも「修験の道」として、修験道に励む行者が利用した道ともされています。伊勢

路もそうですが、中辺路以外は、主に江戸時代以降、庶民を中心とした霊場巡礼の風習の増加に伴って、参詣道としての利用が広がったと考えられます。

**伊藤あや** 江戸時代の庶民による巡礼の増加ということですが、当時、熊野参詣道伊勢路のことを絵や文字で紹介している『西国三十三所名所図会』という本があったとお聞きしました。この名所図会とはどういうものなのでしょうか。

**伊藤文彦** 名所図会というのは、江戸時代に刊行された、全国各地の名所旧跡や景勝地の由来について挿絵を交えて紹介する名所案内書のようなものです。『西国三十三所名所図会』は、嘉永（かえい）六年、一八五三年に大坂の暁鐘成（あかつきかねなり）という人物が著したものです。江戸時代になると、庶民による各地の寺社仏閣への参詣が盛んになります。これには物見遊山、観光的な性格もあり、名所図会は旅の道案内に大変重宝

されました。

**伊藤あや** 当時のガイドブックともいえるものなのでですね。

**伊藤文彦** そういう風に考えていいと思います。

**伊藤あや** そのガイドブック、名所図会には、熊野までの旅の途中の名物のようなものも書かれていますか。

**伊藤文彦** もちろん、所々にそんな情報も織り込まれていますね。昔から熊野は海の幸に恵まれているわけですから、例えば、鰹節が作られている様子の絵や、軒先でマグロの切り身を商っている絵などもあります。また、食べ物以外でも、七里御浜で採集される那智黒石などを当地の名物として紹介しています。

**伊藤あや** 今でも特産品として知られているものもありますね。こうして新鮮な海産物を食べられるのが、伊勢路の旅の楽しみになっていたのでしょうかね。

**伊藤文彦** 旅の様子を記した日記の中には、浜で鯛を買って、宿で料理してもらった、なんていう記事もありますから、旅の途中で料理を楽しむ人もいたようです。ただ、熊野や西国巡礼をする人の中には、肉はおろか魚も食わず、精進して旅を続ける人もいたようですけどね。

**伊藤あや** 旅人によつては、食べ物を楽しみたいと思う人もいれば、精進潔斎する人もいたということですね。

ところで伊藤さんは、「伊勢から熊野へ聖地巡礼歩き旅復活プロジェクト」として、伊勢路を伊勢から熊野まで歩いたそうですが、実際に歩いてみて何か気づかれたことがありますか。感想も含めてお話をいただけますか。

**伊藤文彦** そうですね。伊勢路の場合、私は車や観光バスで来て、石畳のきれいな峠道だけを歩いて帰っていく方がほとんどという現状を、もったいないと思っていたのです。伊勢路は峠道以外でも、いろいろな情景を感じることができますし、なによりも、旅の目的地が霊場である熊野三山で

あるという意識がない、切り離された状態では、その本当の良さというのは味わえないのではないかと思っていました。

しかし、伊勢路は、現代に生きる私たちが、伊勢から熊野まで通して歩く価値があるか、本当に感動するのか、人に勧めることができるかは、実際に歩いたことも無かったので、自信がありませんでした。そこでまずは、実際に歩いてみることにしました。

ただ、一人で歩くよりは、いろんな立場の人と一緒に歩く方が良いのじゃないか、そんなことを思いまして、最初は知人に呼びかけ、さらにその知人が別の知人を呼び込んでくれまして、日本の各地、海外では台湾の知人なども集まり、上は七十五歳から下は九歳まで、結果的に多くの人と伊勢から熊野まで踏破することができました。

**伊藤あや** 歩いてみたいと思っていて、一人で歩くのは躊躇しますよね。それで目的地の熊野まで着かれた時、いかがでしたか。



伊藤文彦 実際に、熊野本宮にたどり着いたとき、「おー」って、両手をあげて「ついたー」って叫んでいるのです。熊野参詣道伊勢路のすばらしさ、その良さ、頭では分かっていたけど、それを身体全体で、ちよつとキザかもしれないませんが、心の底、魂で感じたというか、実感したように思います。それを達成感と言っても良いかもしれないし、無事につけたという安堵感といっても良いかもしれないし、思い返してみますと、一番大きかったのはこれで旅が終わるといふ寂しさ、だったのじゃないでしょうか。

もちろん、伊勢から熊野までの道中でも、峠道から見える景色、雰囲気のある建物、石仏、宿、食べ物など、私を含め、参加者の皆さんも、歩き旅の面白さを感じながら歩けたと思います。道中の安全という意味では、昔と比べたら今のほうが随分安全に旅ができると思いますが、それでも歩き続けるということは、決して楽なことではありません。山登りの好きな

メンバーもいましたが、平地の、それも国道沿いの歩道を延々と歩く場所などでは、「やる気」というか「歩く気」を維持するのが大変でしたし、あたりが暗くなってからも宿を目指してひたすら歩く必要があったときなんかは、本当に気が滅入ります。ちよつと怖いような、そんな感覚がありました。

**伊藤あや** 周りの景色で気が紛れているうちはいいのでしようけど。暗くなるで大変ですね。

**伊藤文彦** はい。また皆と予定が合わず、一人で歩いた区間もあつたんですけど、一人で歩くと、疲労感がいつそう激しくてもう、心が折れそうになりました。こうしてみると、江戸時代も今も、伊勢から熊野まで歩く旅の苦労はあまり変わらないのではないかと思いました。

幾多の苦難を乗り越えて、聖地熊野へたどり着く。無事にたどり着けたのは、天候に恵まれたなら、それは大自然のおかげだったり、無事に歩き



伊勢から熊野へ聖地巡礼歩き旅復活プロジェクトの様子

通したのは、沿道で出会う人々の助けのおかげだったりするわけですが、一つの旅を無事に乗り切ったことへの感謝の気持ち自然と湧き上がってくる。これこそが巡礼旅、そして巡礼道の本当の素晴らしさなのだと思います。

**伊藤あや** お話をお聞きするだけで、伊藤さんが目的地の熊野三山へたどり着いて、感動されている姿が目には浮かんできます。ところで三重県内では、世界遺産登録されているのは、峠の道が中心なのですよ。

**伊藤文彦** そうです。文化財として日本の法律で保護されていて、世界遺産登録されている区間は、峠道が中心となっていて、里の中を通る道や市街地の街道は厳密には世界遺産に含まれません。

ただ、そういう部分でも、所々に江戸時代から変わらない風景が残っていたり、江戸時代の道標や石仏を見かけたりすることもあるのです。ようするに、アスファルトの道だろうと、世界遺産に登録されている峠道の部

分だろうと、これらすべてが熊野の霊場へ向かう参詣道の一部ということになりますから、歩いて霊場までたどり着くことができる道全部に本来の価値があると言って良いと思います。この道は熊野三山という霊場へとつながっている道なのだと意識すること、これが何より大切なのです。

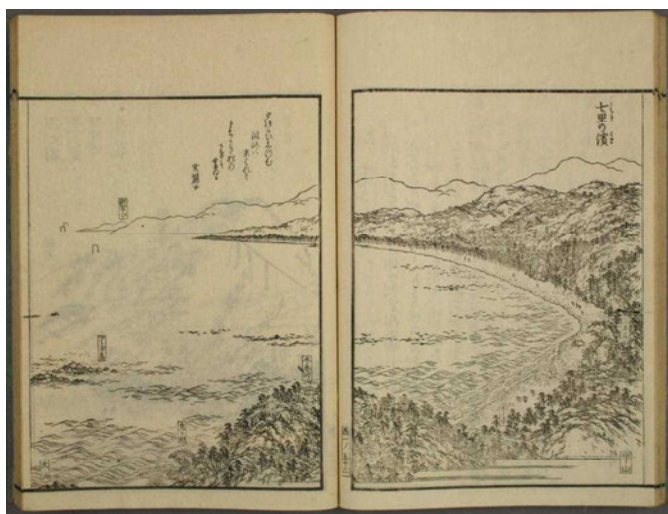
実は、法律で保護するために行う文化財の指定は、その歴史的な価値も大切ですが、その土地と結びついて現在も確認できるものか、あるいは遺跡となつてその痕跡を残していると証明できることが前提となります。したがって、大きく形状や周囲の景観が改変されている場合は、その対象とならないことが多いですね。

**伊藤あや** 峠道だけでなく、七里御浜や熊野川も熊野参詣道に含まれていませんよ。

**伊藤文彦** そうですね。巡礼道として砂浜や川を含む、というのがこの「紀伊山地の霊場と参詣道」の大きな特色の一つだと思います。七里御浜は、

本来の街道とは違いますが、『西国三十三所名所図会』の挿絵に、松林の中の街道ではなく、浜を新宮に向かって歩いている旅人の姿が描かれています。それも一人二人でなく、何人も、ですね。実際の様子を描いたものでないにしろ、そのような人々が普通にいたことがうかがわれますね。

それと、熊野川ですが、これはもちろん街道というよりは川船の道、航路ということですね。これは、熊野本宮に参詣したのち、川



西国三十三所名所図会（七里御浜）  
（早稲田大学図書館所蔵）

船で新宮、速玉大社へ向かうことも少なくなかったようです。両岸の景色が言葉にならないほど美しい、などと紹介している本もあります。本宮大社と速玉大社は、熊野川の両岸が絶壁に近い景観だったため、陸地に行くには険しく、なかなかの悪路だったのでしょう。

**伊藤あや** そうなると、世界遺産に登録されている峠道だけでなく、街中や国道沿いの道でも伊勢路を知るうえで重要ということになるのですね。

**伊藤文彦** そうです。世界遺産登録されている区間は寸断していますが、本当に世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を理解するには、登録されている区間以外の道についても合わせて考える必要があると思います。

**伊藤あや** 参詣道の魅力というものは、目的地までつながって歩けるといふことにあるのですね。

紀伊山地の霊場について



**伊藤あや** それでは次に、参詣道の目的地といえますか、世界遺産の霊場となつている所について、お話をうかがいます。紀伊山地の霊場として「熊野三山」「高野山」「吉野・大峯」の三か所が登録されているのですが、とくに「熊野三山」についてお聞きします。「熊野三山」は、「速玉大社」「本宮大社」「那智大社」の3つの神社を総称されているようなのですが、これは伊勢神宮の内宮と外宮のような関係なのですか。

**伊藤文彦** 伊勢神宮の内宮、外宮の関係と、熊野三山の三つの神社の関係とは少し違いますね。熊野三山の場合、熊野本宮大社は熊野坐神社（くまのにますじんじゃ）ともいわれ、家都御子神（けつみこのかみ）を主祭神とする神社です。熊野速玉大社は、熊野速玉神（くまのはやたまのかみ）と熊野夫須美神（くまのふすみのかみ）を主祭神とする神社です。熊野那智大社は、那智の大滝を祭神にしていたもので、元々は修験の修行場ともいわれ、社殿の建築は、他二社より遅れたとされていますが、主祭神とし

て熊野夫須美神を祀るようになりました。この三柱の神様は、それぞれ、家都御子神はスサノヲノミコト、熊野速玉大神はイザナギノミコト、熊野夫須美大神をイザナミノミコトであるとして説明される場合もあります。

また、日本に仏教が伝わってきたあと、神様と仏様が融合する考え方が生まれます。これを、神仏習合思想というのですが、そのなかで、家都御子神は阿弥陀如来、熊野速玉大神を薬師如来、そして熊野夫須美大神を千手観音菩薩のそれぞれ化身なのだとして信仰されるようになります。それで、この熊野三山の主祭神を合わせて、熊野三所権現と呼んでいました。いまでも、熊野権現、熊野三所権現、という言い方はよくします。このように三つの神社は主にお祀りする主祭神はそれぞれ異なるのですが、それぞれの神社の社殿においては、三所権現にあたる三柱の神すべてを祀っています。ですから、熊野三山には、三つの神社間にランクのようなものはありませんでした。

**伊藤あや** 伊勢神宮の場合は少し違いますね。

**伊藤文彦** 伊勢神宮は内宮と外宮を合わせて正宮（しようぐう）といいます。他に別宮と呼ばれる正宮に次ぐ社、さらに摂社、末社、所管社としてランク分けされた神社を含めて一二五社が伊勢神宮を広い意味で構成しています。正宮とする内宮と外宮も、皇祖神とするアマテラスオオミカミを祀る内宮に対して、その御食、つまり食事を調ずる豊受大神を祀る外宮という関係にあります。

**伊藤あや** そうすると、熊野の場合、3つの神社は、日本の神話に登場するイザナギ、イザナミ、スサノヲを祭神としているのですね。すると伊勢神宮の内宮のアマテラス、これらの神々の関係は、神話の中では確か親子や兄弟でしたよね。

**伊藤文彦** イザナギとイザナミは夫婦で、日本の国生みをした創世神ですね。アマテラスとスサノヲはイザナギの体から生まれたとされ、二柱の神

は姉弟ということになります。

**伊藤あや** 日本の神話の原点が、伊勢と熊野にあるわけですね。ところで、伊勢神宮と熊野三山の違いは、そのほかにはどういふところと言えますか。

**伊藤文彦** 伊勢神宮は古代においては、皇祖神を祀る関係上、天皇のみが幣帛、神への捧げものを奉じることができ、その勅使として皇族や上級の貴族が参詣する、あるいは天皇の代理として任命された齋王が神宮に奉仕する以外は、参詣そのものが許されませんでした。熊野三山の場合は、平安時代には皇族や貴族の参詣が頻繁に行われましたが、どちらかといえば、それ以前から、行者らによる霊場または修行の場として、盛んに参詣の対象となっていました。

この古代における参詣のあり方は、非常に大きな違いです。それが中世以降、武家社会となり、さらに戦乱の収まった江戸時代に入ると、庶民でも伊勢や熊野への参詣が飛躍的に増えました。これは、それまでの皇族や

貴族らによる寄進等で成り立っていた経済基盤が大きく崩れ、それを克服するために御師らが広く庶民層まで営業活動を行っていた、そのことが一つの原因です。

その結果、霊場のあり方も大きく変質していきました。この時点で庶民にとって伊勢も熊野も垣根がなくなり、商売繁盛、五穀豊穰などの現世利益を願う信仰、そして物見遊山の気分で旅を楽しむようになったのだと思います。

**伊藤あや** そうなのですね、よくわかりました。では、話を交えて、世界遺産に登録された紀伊山地の3つの霊場、「熊野」「高野」「吉野」の違いというはあるのでしょうか。

**伊藤文彦** 本来、高野山は平安時代に空海を開祖とする金剛峯寺を真言密教の総本山とする仏教の聖地、吉野の金峯山寺は、日本古来の山岳信仰など自然崇拜に基づく修験道の本山で、山上ヶ岳の大峰山寺を含め、付近一

帯は、修驗道の靈場であり、修行場でした。修驗道は、山奥を歩き、荒行をしたりして修行を重ねることで、神仏に少しでも近づこうとするものです。

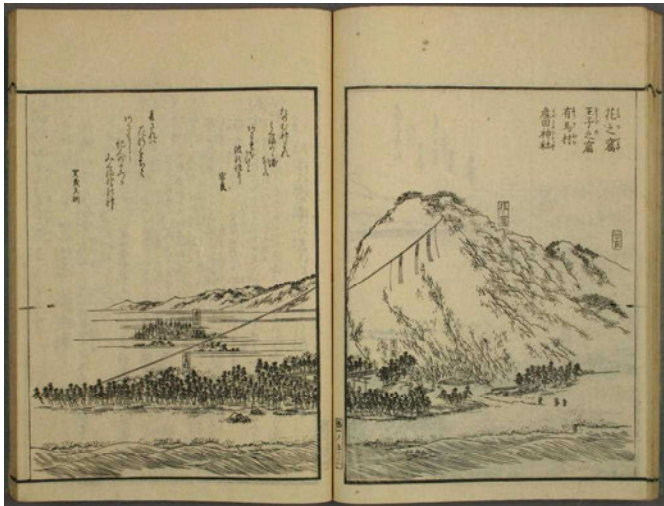
熊野三山は、元來神社であり、紀伊山地の三つの靈場は、それぞれ根本の異なるものだったのですが、紀伊山地という比較的近接した地域に、神、仏、修驗という異なる聖地が形成され、平安時代になると、当時の神仏習合思想も高まり、それぞれが一体となり、紀伊山地の靈場として有機的に結びつき、国内でも稀有な地域となったわけです。

**伊藤あや** なるほど。これらの3つの特徴のある靈場とそれをつなぐ参詣道が紀伊山地にまとまって所在する、そういうところが一つの世界遺産として評価されたわけですね。

それでは、もう一度、熊野に話を戻しますが、三重県には世界遺産登録されている靈場は含まれていないようなのですが、伊勢から熊野三山まで

向かう間に、そのような場所はな  
かったのでしょうか。

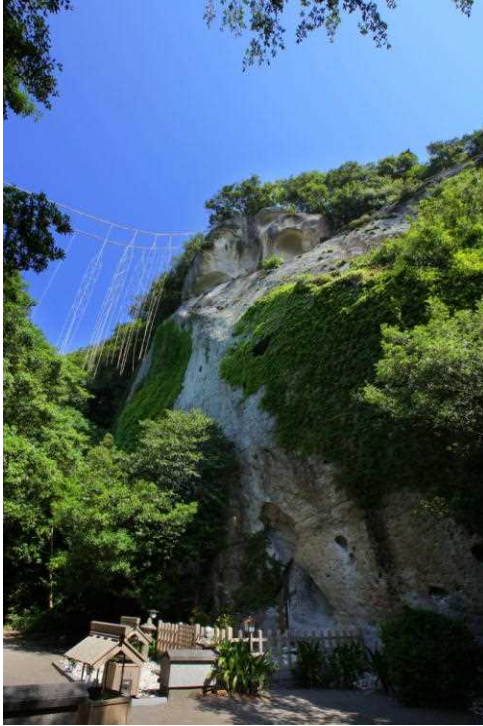
**伊藤文彦** 世界遺産の霊場として  
登録されている三重県の資産はあ  
りませんが、ある意味、小規模な  
霊場と考えられるものはいくつか  
あったと考えられます。それは、  
寺院や神社だけでなく、修行の場、  
祈りの場というものも含まれま  
す。三重県の場合、代表的なのが  
熊野市の花の窟です。ここは『日  
本書紀』の中に、国生みの神イザ  
ナミノミコトの墓の場所として考



西国三十三所名所図会（花の窟）  
（早稲田大学図書館所蔵）

えられてきた場所ので、古くから信仰のあつた場所です。岩壁の窪地にお経が納められたりもしていたようです。

『いほぬし』にもその記述があり、景勝地であることもあつて、江戸時代には庶民の信仰を集め、熊野へ参詣する前に必ず立ち寄る所だったようです。花の窟以外にも、修験道の行者にまつわる場所が



花の窟（熊野市）



街道沿いに見られます。例えば馬越峠道の近くの聖観音や三十三体の観音石仏を安置した岩屋堂、あるいは八鬼山越えの荒神堂などがありますね。

伊藤あや ありがとうございます。

世界遺産を語る

伊藤あや　それでは最後に、世界遺産の意義についておうかがいしたいと思います。「紀伊山地の霊場と参詣道」のような、霊場または聖地とそこへ向かう道が世界遺産となっているものはあるのでしょうか。

伊藤文彦　世界遺産の中で、聖地への巡礼や参詣のための道が資産の中心として最初に登録になったのは、スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路」です。一九九三年に世界遺産に登録されました。次に登録されたのは、「紀伊山地の霊場と参詣道」で、二〇〇四年ですね。そして最近、パレスチナから申請され、二〇一二年に登録されたのが、「イエス生誕の地…ベツレヘムの聖誕教会と巡礼路」です。さらに、二〇一三年に登録された日本の「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」の中の富士登拝のための登山道は、信仰の道と言えるかもしれません。

あとは二〇一〇年に登録されたメキシコの銀の道や島根県の石見銀山街道、そして今年、二〇一四年登録となりました、有名なシルクロードなど、

道が世界遺産に含まれるものがありますが、これらは物流の道として評価されたもので、信仰の道ではありません。

**伊藤あや**　すると、世界遺産として道が資産に含まれているものが少なく、そのうち、巡礼や参詣のための道となると、スペインとフランスの「サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路」、パレスチナの「イエス生誕の地・ベツレヘムの聖誕教会と巡礼路」、そして日本の「紀伊山地の霊場と参詣道」、考え方によつては「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」も含めても、それだけなのですね。

**伊藤文彦**　そうですね。しかも総距離が百キロを越える信仰の道は、「サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路」と「紀伊山地の霊場と参詣道」だけです。

**伊藤あや**　伊藤さんは「サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路」を实际歩かれたということですが、その感想や熊野参詣道と比較してその

違いなどいかがでしょうか。

**伊藤文彦** 「サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路」はスペインの西部にあるキリストの弟子の一人、聖ヤコブを祀る聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂をめざす巡礼路です。熊野参詣道と同様、千年以上の歴史がある古い巡礼路で、本来、この巡礼路はヨーロッパ各地からこのスペイン西部のサンティアゴ・デ・コンポステーラまでつながっているのですけども、そのなかでもフランス人の道と呼ばれるフランスからスペインの北部を一直線に結んでいく道、これを中心に世界遺産に登録されています。

私がい実際に歩いたのは、この巡礼路の最後の部分、サンティアゴ・デ・コンポステーラまであと百十キロの地点からで、なぜそこからかと言いますと、実は百キロ以上歩いて巡礼旅を行うと、巡礼証明書を発行してもらえるのです。旅先では、クレデンシヤルという巡礼手帳に宿泊地やカフェ、

観光案内書など、通過した村々にあるスタンプを一日二個以上押してもらうことが実際に歩いたことの証明になります。

伊藤あや その巡礼路って、今でも人が歩いているのですか。

伊藤文彦 歩いていきます。しかもかなり大勢の人が。このサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路は、本当に多くの人が実際に歩いている



巡礼証明書（右上）・巡礼者であることを示す帆立貝の飾り（左上）・クレデンシャル（下）

んですね。その多くがカップルだったり、夫婦だったり、友人のグループや家族連れだったりしました。国籍も様々で、ご当地のスペイン以外にも、ヨーロッパの各国、南米の諸国、アジアでは韓国の人にも会いました。とにかく、多くの人がサンティアゴ・デ・コンポステーラを目指して歩いている、これに衝撃を受けました。

**伊藤あや** そんなにいろいろな国の人々が、たくさん旅をしているとなると、それを受け入れる宿や食堂などは必要でしょうし、道に迷わないための案内板のようなものもあつたのでしょうか。

**伊藤文彦** そうですね。歩き旅を支える様々な施設もちゃんと整っていました。たとえば、巡礼宿がだいたい四キロごとにはありますし、食事も出来るカフェが、これも四キロごとぐらいにはありました。それから一番驚いたのは道標で、分かれ道にはきちんとして設置してある上に、それでもわかりにくいところでは地元の方が、自分の家の壁などにペンキで黄色い矢印



サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路と道標



を書いて、方向を示してくれているんですね。ですから、地図がなくても、ガイドブックがなくても歩き旅が出来るのです。

もちろん、沿道の住民の皆さんも、巡礼者が歩き旅をしていることをごくごく普通の事として受け止めていて、「良い巡礼を！」という意味の「ブエン・カミーノ！」という言葉を必ずかけてくれるのですね。そういう巡礼を支えるシステムと人々の気持ちがあるということにも驚きました。

**伊藤あや** 今でも巡礼路を地域が一体となって支えているんですね。土地も言葉もわからない場所を、おひとり歩いて心細くなかったですか。

**伊藤文彦** 実は、熊野参詣道を伊勢から熊野まで歩きに行く前に、私はこのサンティアゴ巡礼路に行ったのです。ですから、正直、あまり歩きなれていなかったのですけど、とにかく、なかなか大変でした。私自身は4日間で約百十キロを歩き切ったのですが、正直、巡礼歩き旅がこれほど辛いものとは思いませんでした。日本で普通に生活していて、一日に二十キロ



サンティアゴ  
・デ・コンポ  
ステーラへの  
巡礼路の様子  
(スペイン)

や三十キロ歩くことはまずないですよ。しかも毎日です。

巡礼旅の2日目には足や関節が痛くなってきた、杖に頼って足を引きずって歩くようになっていきました。私は一人旅でしたから、そういう状態ではすぐ心細いですし、言葉も通じないので助けてもらうこともできません。もう辛くて辛くて、たまらないのです。だからこそ、旅の終わりに聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂にたどり着いたときは、もうはじけるような言葉にならない感動を味わうのです。着いた瞬間にやはり叫んでしまいました。「着いたー」って。実はこの聖地にたどり着いたときに味わう強烈な感動というのが巡礼旅の根源的な素晴らしさ、価値なのだと思います。

**伊藤あや** お話のように、聖地への巡礼と単なる観光とを区別化しているのは面白いですね。巡礼手帳「クレデンシャル」は、日本での西国巡礼や四国巡礼などで朱印しゆいんを集めるのと似ていますね。

**伊藤文彦** はい、よく似ていますね。ただ、サンティアゴ巡礼路では、教会のほか、宿やそれ以外の施設でもスタンプがあり、巡礼の証明のためとはいえ、記念スタンプのようなイメージです。日本の場合、参詣に立ち寄った寺社で記入、押印してもらい、「お札」のような扱いがなされますね。

**伊藤あや** すると、スペインでは毎日、大勢の人が歩いて聖地まで向かう姿が見られるんですね。

**伊藤文彦** そうですね、今でもフランスからピレネー山脈を越えて八〇〇キロもの距離を巡礼に来る人だけでも、年間十五万人はいると言われています。

**伊藤あや** 十五万人はすごいですね。歩いて目的地に向かう人たちの姿も、世界遺産の大切な一部なのですね。それでは、最後に、熊野参詣道伊勢路の場合、世界遺産となった意義、その価値、あと世界遺産としてこれから先、どうあるべきかについて、お話をいただきたいと思います。

**伊藤文彦** 熊野参詣道伊勢路は、伊勢神宮と熊野三山を結ぶ道として評価され世界遺産に登録されました。この熊野参詣道伊勢路は、多くの巡礼者が千年以上にわたって実際に旅をした道です。巡礼者の旅は過酷で辛いものだったでしょうが、それだけ、霊場にたどり着いたときの感動は大きかったでしょう。江戸時代やそれ以前の旅を記録した紀行文や日記を読むとその気持ちがよくわかります。

熊野参詣道伊勢路が巡礼路として世界遺産に登録された理由は、まさに巡礼旅のもたらす感動の中に、今も昔も変わらぬ価値があると考えられたからです。こうした価値に注目すれば、石畳や森林景観の美しい峠道だけを歩くだけでは、熊野参詣道伊勢路のもたらす本当の感動を味わうことは難しいでしょう。本当の感動を体験しようとするならば、スペインの巡礼路のように、伊勢から熊野まで巡礼歩き旅を実際に体験するのがもつともよい方法だといえます。

戦国時代から江戸時代に入ると、多くの庶民が伊勢から熊野まで巡礼歩き旅を行いました。実は、当時の人々の歩き旅を支えた道標や石仏、寺院、さらには宿屋や峠の茶店やその跡などは今でも残っています。峠から見える風景の美しさもまったく変わることなく残っています。私たちは少なくとも江戸時代の人々と同じ感動を巡礼歩き旅の道中で体験することが出来ます。そして、聖地熊野三山にたどり着いたときの感動は、交通機関が高度に発達した現代においては江戸時代の人々とはまた違う、よりいつそう強烈な感動となるでしょう。

もちろん、すべての人が伊勢から熊野まで歩き通さなければならぬこととはありません。峠道だけを歩きに来るのもよい体験です。ただ、そこに伊勢から熊野まで巡礼歩き旅をする人の姿があり、熊野参詣道伊勢路の真価は伊勢から熊野へつながる巡礼路であるということを、訪れるすべての人が知ることが何よりも重要なのです。そうすることによって、熊野参詣

道伊勢路は現代に巡礼路として復活し、その価値はこれから百年、二百年と守られていくことになる、私は考えています。

**伊藤あや** 歴史的背景や実体験を織り交ぜ、いろいろと興味深い話をありますが、ありがとうございます。本日は、『歩いて旅する！「世界遺産になった道―熊野参詣道伊勢路―』と題しまして、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の価値や意義について、コメンテーターとして伊藤文彦さんからお話しをうかがいました。伊藤さん、ありがとうございました。

**伊藤文彦** ありがとうございます。



対談の様子

## 用語解説

齋宮歴史博物館（さいくうれきしはくぶつかん）

三重県多気郡明和町に所在する国史跡齋宮跡に関する調査・研究・展示を行う県立の博物館施設。

国史跡齋宮跡（くにしせきさいくうあと）

三重県多気郡明和町に所在する遺跡で、天皇に代わり伊勢神宮に奉仕した齋王の宮殿や役所の跡。昭和五四年に面積一七〇ヘクタールが国史跡指定を受けた。

田丸（たまる）

三重県度会郡玉城町に所在した田丸城の城下町一帯を指す。田丸城は、北畠親房らによって築かれた城で、織田信長の次男、信雄が北畠氏の養子となり居城として改築した。江戸時代には、紀州徳川藩の領地となった。



伊勢本街道（いせほんかいどう）

伊勢と大和を結ぶ街道で、伊勢から田丸、津市美杉町の多気、奈良の榛原、桜井を経由する街道。

東海道中膝栗毛（とうかいどうちゅうひざくりげ）

江戸時代の滑稽本と呼ばれる、大衆向けの読み物の一つで、一九世紀の初めに、十返舎一九によって書かれた。江戸の住人、弥次郎兵衛と喜多八が、伊勢参りに出かけ、さらに京都や大坂を旅する様子を描いたもの。

大坂（おさか・おおざか）

現在の大阪市付近を指し、明治時代より以前に用いられた表記。

鈴木牧之（すずきぼくし）

越後の豪商の家に生まれ、商売のため一九歳の時、江戸へ上り、商才を発揮させる傍ら、俳諧や書画、随筆などの文筆活動を続けた。

野田泉光院（のだせんこういん）

現在の宮崎県にあたる佐土原藩出身の修験僧で、五六歳で全国行脚の修行に出、六年をかけて故郷に戻り、「日本九峰修行日記」を執筆した。

**増基法師**（ぞうきほうし）

平安時代の僧・歌人で、中古三十六歌仙の一人。生没年は不明で、「廬主（いおぬし）」と号していた。

**楯ヶ崎**（たてがさき）

三重県熊野市と尾鷲市の境界付近にある高さ八〇メートルに及ぶ岩塊で、海に向かって楯を並べたように見えることからこの名がある。

**松坂**（まつさか・まつざか）

現在の三重県松阪市の地名の元になった松阪市中心部の町名。織田信長や豊臣秀吉に仕えた武将、蒲生氏郷が城と城下町を築いて発展した。「大坂」が「大阪」と呼ばれるようになったに伴い、「松阪」に表記を改めた。

**藤原定家**（ふじわらのさだいえ・ふじわらのていか）

平安時代の終わり頃から鎌倉時代の初め頃に活躍した公家で、正二位権中納言。歌人として著名で『新古今和歌集』などに関わったほか、生涯の日記『明月記』も当時の様子を克明に記した歴史書として有名。

#### 九十九王子（くじゅくおうじ）

熊野参詣道の紀伊路、中辺路沿いに、熊野詣の先達を務めた熊野の修験者により設けられた祈りの場所。「九十九」は実数ではなく、たくさんあることを意味したものの。

#### 西行（さいぎょう）

平安時代末期から鎌倉時代初期の人物で、出家前は佐藤義清（さとうのりきよ）といい、鳥羽上皇の北面の武士として仕えた時は平清盛と同僚だった。出家後は、東北地方や中四国などを行脚し、伊勢二見浦に庵を設けて移り住んだ。

#### 梁塵秘抄（りょうじんひしょう）

平安時代末期に、「今様」と呼ばれる歌謡を好んだ後白河法皇が書き留めた歌謡集。

### 善教寺（ぜんきょうじ）

三重県四日市市南富田町に所在し、現在は浄土真宗高田派の寺院。本尊の阿弥陀如来立像の像内に、鎌倉時代前半に北伊勢地方に在住した武士、藤原実重の約二〇年にわたる善根を記した『作善日記』や願文が納められていた。

### 豊受大神（とようけのおおかみ）

伊勢神宮外宮の主祭神で、内宮の主祭神であるアマテラスオオミカミのウケノ食べ物を饗するために、丹波から遷宮されたといわれ、五穀を司る農業の神とされる。

### 伊勢曆（いせごよみ）

伊勢神宮の御師が、神宮大麻とともに伊勢の土産物として配布したもの

で、木版刷りを折りたたんで冊子化したものが多い。正月から十二月までの日ごとに節季や吉凶の占いなどが記されていた。

### 伊勢講（いせこう）

伊勢神宮への参詣を目的に集まった信者の団体。村全体で組織化することも多かった。伊勢への旅費を積み立て、くじ引きにより参詣の代表者が決められた。

### 笈（おい）

「背に負うもの」という意味。もとは修験者が仏像や仏具、衣服、食器などをに入れて運ぶ木の箱。

### 先達（せんだつ）

熊野参詣に際して、参詣者の安全を確保し、道案内するとともに、参詣にあたっての作法や儀礼を先導する人物。

### 那智山青岸渡寺（なちさんせいがんとじ）

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町にある寺院で、西国三十三所観音霊場第一番札所。熊野那智大社の社地にあり、如意輪観音菩薩を本尊とし、古くは如意輪堂と呼ばれていた。

#### 谷汲山華厳寺（たにぐみさんげごんじ）

岐阜県揖斐郡揖斐川町にある寺院で、西国三十三所観音霊場第三十三番札所。本尊の十一面観音菩薩は秘仏となっている。御詠歌の一つに「今までは親と頼みし 笈摺を 脱ぎて納むる 美濃の谷汲」とあり、巡礼の最後に笈摺を当時に納めていた。

#### 四国八十八ヶ所遍路（しこくはちじゅうはちかしよへんろ）

四国にある空海ゆかりの八十八の寺院を札所として巡礼することをいう。これらの寺院を結ぶ道は、遍路道と呼ばれる。

#### 三井寺（みいでら）

滋賀県大津市にある寺院で、園城寺（おんじょうじ）とも称している。

一角にある観音堂は、西国三十三所観音霊場の第十四番札所である。三井寺中興の祖である平安時代初めの僧、円珍は、熊野三山や大峰山を巡る修験の修行も行っていたことから、三井寺は修験道との繋がりが深かった。

### 長谷寺（はせでら）

奈良県桜井市にある寺院で、西国三十三所観音霊場第八番札所。『枕草子』『源氏物語』『更級日記』など、平安時代の文学作品にも多く登場し、観音霊場として信仰を集めた。

### 三室戸寺（みむろとじ）

京都府宇治市の寺院で、西国三十三所観音霊場第一〇番札所。千手観音とする本尊は、厳格に秘仏とされている。千手観音像は、一般に腕の本数は四十二臂（ひ）となるものが通常だが、この本尊は二臂のみとされる。  
藤原道長（ふじわらのみちなが）

平安時代中頃の公家で、摂政だった父の兼家を継いで権力を掌握し、娘

を次々と入内させ、天皇の外祖父として摂政・関白の地位に上り詰め、権勢を思いのままにした。

#### 荷坂峠道（にさかとうげみち）

熊野参詣道のうち、三重県度会郡大紀町から、北牟婁郡紀北町へと通じる峠道。峠には茶屋の跡があり、ここから紀北町へ降りる古道が世界遺産に登録されている。紀州藩初代藩主の徳川頼宣の命で整備された道といわれている。

#### ツヅラト峠道

三重県度会郡大紀町から北牟婁郡紀北町へ通じる熊野参詣道の一部とされ、世界遺産登録されている。狭小な急勾配の坂道が続くことから、江戸時代以降は荷坂峠道が主として参詣道として利用されたといわれている。

#### 松本峠（まつもととうげ）

三重県熊野市の大泊と木本を結ぶ峠。石畳の道として整備されており、



峠には瑞老山という寺とともに茶屋があり、人身大の地藏石仏が建つ。

### 浜街道（はまかいどう）

三重県熊野市井戸町から南牟婁郡紀宝町鵜殿までの七里御浜に沿った街道の通称で、新宮速玉大社や那智大社へ向かう参詣道の一部として利用された。

### 本宮道（ほんぐうどう）

花の窟で浜街道から分かれて、西へ向かい、横垣峠道や風伝峠道を通り、熊野市楊枝から熊野川を渡り、万歳峠を経て熊野本宮大社へと向かう参詣道の一部。

### 横垣峠（よこがきとうげ）

三重県南牟婁郡御浜町神木（こうのぎ）と阪本を結ぶ峠道で、神木流紋岩と呼ばれる地元の石材を利用した石畳が整然と敷かれた古道。

### 風伝峠（ふうでんとうげ）

三重県南牟婁郡御浜町尾呂志から熊野市紀和町へと通じる峠道で、峠から麓にかけて朝霧が発生する、「風伝おろし」と呼ばれる現象が有名。

### 万歳峠（ばんぜとうげ）

「番西峠」とも書き、熊野川を渡った和歌山県新宮市熊野川町志古から熊野本宮大社を目指す本宮道の峠道の一つ。

### 馬越峠道（まごせとうげみち）

三重県北牟婁郡紀北町と尾鷲市を結ぶ峠道。伊勢路の中でも石畳が最も美しいといわれている。峠道の途中に一里塚もあり、峠には茶屋跡と岩船地藏堂という御堂が建っていた。

### 七里御浜（しちりみはま）

三重県熊野市木本町から南牟婁郡紀宝町鵜殿までの約二十二キロメートルに及ぶ砂礫海岸。参詣道そのものではないが、風光明媚な浜を巡礼者が新宮へ向かって歩いた文化的景観が評価されて世界遺産の一部となった。

一里塚（いちりづか）

とくに江戸時代になって、幕府の命により全国の主要な街道に、約四キロメートルごとの目印として、塚状の土盛りがなされ、榎などの木が植えられた。

参宮街道（さんぐうかいどう）

伊勢参宮街道のことで、各地から伊勢神宮へ参宮するための街道を指す。

紀州藩領（きしゅうはんりょう）

紀州和歌山藩は、徳川御三家の一つで、その領地は、現在の和歌山県である紀伊国一国三十七万石だけでなく、伊勢国の松坂、田丸、白子など十八万石を加え、合わせて五十五万五千石の石高とした

徳川頼宣（とくがわよりのぶ）

徳川家康の一〇男で、徳川御三家の紀州藩初代藩主。浅野家の広島藩転封の後に入府し、城下町をはじめ、熊野街道を含む領内の街道の整備に着

手した、

### 八鬼山越え（やぎやまごえ）

三重県尾鷲市矢の浜と三木里を結ぶ参詣道で、伊勢路最大の難所といわれる。途中、九木峠、三木峠という二つの峠を越える。矢の浜側から三木峠まで、石仏型の道標「町石（ちようせき）」が一町（約一〇九メートル）ごとに設置された。

### 熊野川

現在の三重県と和歌山県の県境に流れる一級河川で、熊野本宮大社から新宮速玉大社を結ぶ川船の航路、「川の道」として世界遺産範囲に含まれた。

### スサノヲノミコト

「素戔嗚尊」「建速須佐之男命（たけはやすきののみこと）」などと記され、日本神話に登場する男神。太陽を神格化したアマテラス、月を神格化

したツクヨミとはともにイザナギノミコトから生まれたとされている。

### イザナギノミコト

「伊弉諾命」などとも書く。日本神話に登場する男神。イザナミノミコトとともに、日本国土を「国産み」し、多くの神を「神産み」した日本神話の創世神。

### イザナミノミコト

「伊弉冉命」などとも書く。イザナギノミコトの妻で、「国産み」「神産み」した日本神話の創世神。火の神「軻遇突智（かぐつち）」を産み、火傷が原因で亡くなり、その亡骸は「花の窟」のある熊野に葬られたとされる。  
**神仏習合思想（しんぶつしゅうごうしそう）**

日本古来の土着の神に対する信仰と仏教信仰が混じり合い、独自の信仰に再編成された宗教思想。奈良時代から両者の関係は緊密となり、平安時代以降に体系化されるに至った。

阿弥陀如来（あみだによらい）

西方に「極楽浄土」と呼ばれる仏国土をもち、あらゆる仏の師とされる。

薬師如来（やくしによらい）

東方にあるとされる「瑠璃光浄土（るりこうじょうど）」と呼ばれる世界の主で現世利益（げんぜりやく）、つまり現世に生きる人々を救済する仏として信仰を集める。

千手観音菩薩（せんじゅかんのんぼさつ）

三十三に変化（へんげ）する観音菩薩の変化身の一つで、千本の手とその掌に眼をもち、あまねく人々の願いを漏らさず救済するといわれる仏。

熊野三所権現（くまのさんしょごんげん）

熊野三山に祀られている神のうち、三山の主祭神である「家都美御子（けつみみこ）」「速玉（はやたま）」「牟須美（ふすみ）」の神を指し、神仏習合に際して、権現とされた。

### 別宮（べつぐう）

伊勢神宮を構成する百二十五社のうち、正宮である内宮、外宮に次ぐ格式とされる、「月讀宮（つくよみのみや）」「伊雑宮（いざわのみや）」「原宮（たきはらのみや）」「倭姫宮（やまとひめのみや）」など十四の神社。  
アマテラスオオミカミ

「天照大神」とも書かれる。日本神話で太陽を神格化した女神とされる。皇祖神として位置づけられ、伊勢神宮内宮の主祭神となっている。日本神話によれば、神々の住む高天原を統治していたとされる。イザナギノミコトから産まれ、スサノヲノミコト、ツクヨミノミコトと姉弟とされる。

### 空海（くうかい）

弘法大師という名で知られる平安時代初期の僧で、遣唐使の留学僧として入唐し、密教の法を修め、日本に戻ってから真言宗総本山、高野山金剛峯寺を開いた。

### 金剛峯寺（こんごうぶじ）

和歌山県伊都郡高野町にある高野山真言宗の総本山。周辺には百以上の寺院や関連施設が建てられ、一大宗教都市の様相を呈している。

### 金峯山寺（きんぷせんじ）

奈良県吉野郡吉野町にある寺院で、修験道の総本山。付近は山岳信仰の霊場であり、本尊は蔵王権現で、権現とは権（仮）の姿で現れた神仏という意味で、日本の神々を仏教に取り込んだ際の名称である。

### 大峰山寺（おおみねさんじ）

奈良県吉野郡天川村にある修験道の寺院で、大峰山地の中央に位置する山上ヶ岳の山頂に建つ。本堂には蔵王権現を祀っている。

### 修験道（しゅげんどう）

山籠もりなどを通じて厳しい修行を行い、悟りの境地に立とうとするもので、日本古来の山岳信仰と仏教が習合したものとされる。その修行を行



う者を修験者あるいは山伏などと呼ぶ。

### 岩屋堂（いわやどう）

三重県尾鷲市南浦の山中にあり、馬越峠道を通った西国三十三所巡礼者の多くが立ち寄ったとされる。岩穴を祠とし、聖観音（しようかんのん）を本尊とし、三十三体の観音石仏が安置されている。

### 荒神堂（こうじんどう）

八鬼山越えの道で、峠より手前に茶屋跡とともに所在する御堂で、「八鬼山日輪寺」とも称する。かつては西国三十三所巡礼の前札所（第一番札所の前に立ち寄る札所）ともいわれ、信仰を集めていた。

### サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路

キリストの弟子であるヤコブの遺骸を祀るサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂へと向かう巡礼路で、世界遺産に登録されているのは、フランスの各地からピレネー山脈を越え、スペインの北部を通る。

## イエス生誕の地…ベツレヘムの聖誕教会と巡礼路

キリストの生誕地に建てられた教会とエルサレムと教会や修道院を結ぶ巡礼路が、世界遺産に登録されると同時に、危機遺産に登録された。

## 富士山―信仰の対象と芸術の源泉

静岡県と山梨県にまたがる富士山に関わる信仰や浮世絵などの芸術上の題材になった景観が文化遺産として評価され、世界遺産に登録された。

## 銀の道（ぎんのみち）

「エル・カミノ・レアル・デ・テイエラ・アデントロ」が登録名称で、アメリカ合衆国のニューメキシコ州からメキシコの首都、メキシコシティまでの道路で、一六世紀から三〇〇年間にわたり、主に銀を運ぶために利用された。

## 石見銀山街道（いわみぎんざんかいどう）

島根県大田市の石見銀山の中心地、大森地区より鞆ヶ浦や温泉津の港へ

銀や銀鉱石を運ぶための道で、世界遺産「石見銀山とその文化的景観」の一部。

### シルクロード

中国とカザフスタン、キルギスの三国の共同推薦で、中国の長安や洛陽から敦煌、中央アジアを経て欧州へ向かう天山回廊と沿道の都市、宮殿、仏教寺院を含む八七〇〇キロメートルが「シルクロード…長安⇨天山回廊の交易路網」として世界遺産に登録された。

### 聖ヤコブ

キリストの十二人の使徒の一人。九世紀にヤコブの遺体とされるものが、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラで発見され、当時、レコンキスタと呼ばれるキリスト教徒によるイスラム勢力からの国土奪回の活動のシンボルとして崇められた。

### サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂

スペインのガリシア州にあり、「星の野原」という意味をもつ。ここで聖ヤコブの柩が偶然見つかり、大聖堂が建てられたとされる。キリスト教の最大巡礼地の一つとなり、サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路の終着地となった。

### フランス人の道

サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路のうち、フランスのサン||ジャン||ピエ||ド||ポルという街からピレネー山脈を越え、サンティアゴ・デ・コンポステーラまでイベリア半島の北部を直線的に結ぶ道。

### 朱印（しゅいん）

神社や寺院において、参拝者等に社名や参拝日などを墨書し、印章を押印したもの。集印のための専用の帳面があり、朱印帳と呼ばれる。社名が記されていることから、お札と同等に扱われたりする。